夢のまた夢

雛

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
夢のまた夢

【Ｎコード】
Ｎ７４２０Ｙ

【作者名】
雛

【あらすじ】
夢を見る。
繰り返し同じ色合いの夢を。
夢の中で僕は、存在しない歴史上の人物の息子だった。

一応、戦国時代というか安土・桃山時代っぽい時代。
主人公が大好き！な登場人物ばっかりですが、ハーレムにはならず。
（登場人物が圧倒的に男ばっかりなのと、色気がまったくないから）

※時代考証の甘さと捏造満載な為、何でもありなファンタジーカテゴリーにいれさせてもらいます。
※大昔の蔵出し品：順次アップしていきます。

プロローグ

「おまえさまっ、また浮気したねっ」
「痛っ、いたい、いたい、いたい、おね様、堪忍っ、堪忍してちょーだい」

風采の良くない小男が、気丈そうな女に怒鳴り飛ばされている。

「何度目だと思ってんの！」
「えーと、えーと……5回目だがや」
「今年に入って、12回目やーっ」

指折り数えた男の頬に女の拳が会心の一撃を見舞った。
そのあまりの見事さに思わず感心してぱちぱちと手を叩いた。

「弥々丸……どうしたね？もう遅いから寝んと。子供は寝るのも仕事だよ」

驚いた顔で女が振りむく。
正式には弥勒丸と言うが、そう呼ばれるのは改まった席でだけだ。

「かわや、いく」
「おやおや、あんたはエライ子やねぇ。それくらいの年の時、市やお虎は、しょっちゅうおねしょしてたんだけどねぇ」

立ち上がった女は、羽織っていた打掛をそのまま畳に落とし、間着姿で歩き出す。

「……いちととらがおねしょ？」

「そうさね。市は今は大人な顔してるけど、やんちゃなくせに泣き虫だったんよ」
「ふぅん」

手をつないで長い廊下を歩く。
厠までは遠い。途中の道は暗いし、段もあって幼児には困難だ。
そして、市松が厠の肥溜めに落ちた話を聞いて以来、絶対に一人では行かないと決めていた。

「……おっかあ、おっとう、のびてたな」

ぎゅっと握り締める手の暖かさが好きだった。

「あれくらい、ええんよ。まったくおっとうは浮気もんで仕方ないわ。……あんたはよそで女子こさえて、女房を泣かすような真似したらあかんよ」
「……うん」

よくわからないながらもうなづいた。
呆れたような母の笑みは慈しみに満ちていて、本当に仕方ないと思っているようだった。
その笑みをとても美しいものだと感じる。

「弥々丸はいい子だね。あんたはあたしの宝だよ」
「たから？」
「そうや。あたしとあの人の一番の宝だよ。……この城も、上様からいただいた駿馬も、立派な茶碗やお道具も、おまえに比べたら何の価値もないさね」

嬉しくなって笑うと、母も笑った。

心がほっこりと温かくなった。

第一章　幸也（1）

夢を見る。
繰り返し、繰り返し見る夢はいつもどこか時代がかっている。

「……や、ゆきや、幸也……」

ゆらゆらと身体を揺らす手。
柔らかな香りに心が和らぐ。
（……栞の香りだ）
甘さを残しながらどこかすっきりとした香りは、栞の好んでいる香水だ。薄いピンクのボトルのサムライウーマン……学生時代、一番最初のバイト代で彼女にプレゼントした香りだった。

「……栞」

ゆっくりと目を開く。
覗き込む栞が笑みを浮かべる。

「もう、起きてよー。全然片付かないんだから」
「……ごめん」

苦笑して、そっとその頬に口付ける。

「……おはよう、栞」
「おはよう、幸也」

顔を見合わせて、もう一度、今度は唇に口付ける。

僕が大学を卒業し栞が高校を卒業した8年前に結婚した。早すぎる結婚だったが、家が隣同士でどちらの親も公認の恋人期間が長かった為、反対はまったくなかった。両家とも、親族らしい親族もいなかったせいもある。

栞が大学に進学し、次いで大学院にも進んだために2年前まで学生だったから、子供はまだいない。

そろそろ作ってもいいねと二人で話してはいたが、特別に努力しようとかそういうつもりはなかった。

7歳までの記憶がなく、施設から養子として引き取られて育ったものの、18歳の時にその養子先の両親を相次いで亡くした僕には、子供というのはピンとこなかったし、生まれてくる子供より栞の方がずっと大切だったからだ。

なかなか養子先の家に馴染めなかった僕が、養家の父と母に慣れ、打ち解けることができたのは栞のおかげだった。

小さな小さな栞は、どういうわけか一目で僕に懐いた。遅くに出来た一人娘を溺愛していた隣家の両親は、僕の父母に頼み込んで栞をよく預けにきたものだった。

それは成長してもずっと変わらず、僕はいつも栞と一緒だった。

幼い頃の記憶のない僕はいつもどこかぼんやりした子供で、ここにいる自分を信じきれていなかったけれど、栞がいれば不思議とそんな気持ちにはならなかった。

栞は僕とこの世界を結ぶ絆だった。

僕は自分が異物であるかのような……この世界に馴染まないもののような気がしていたけれど、栞さえいれば普通に暮らしていられたのだ。

「……また、夢見たの？」

「うん。……どうして？」

「何かぼーっとした顔してるから」

「……夫婦喧嘩してたよ……浮気したって言って」

それだけで栞にはすべて通じる。

「……また？」
「そ、また」
「懲りないねぇ」
「……そうだね」

栞はくすくすとおかしげに笑った。僕はその屈託のない笑顔がまぶしくて目を細める。

「……夢の中に、私は出てない？」
「今のところはいないみたいだ」
「残念。……夢の中でも幸也のそばにいたいのに」
「僕もいて欲しいよ」

栞がいたらすぐにわかるだろうと思う。例え、どんな姿をしていても。

「じゃあ、登場したら教えてね」
「勿論」

いつも僕が見る夢は、僕らの間のちょっとした話題だった。
同じ夢というわけではない。でも、どこか同じような色合いの夢で、舞台はいつも一緒だった。
僕は幼い武家の子供で両親がいた。
陽気で楽しい父としっかりものの母……温厚な叔父や、年上の遊び相手達……いつもどこか曖昧で、それでいて目覚めるとその感触が身体に残っているほど生々しかった。

「実は本当だったりして」
「そりゃあ、ありえないんじゃない？時代が違いすぎるし」
「えー、そこらへんはほら、生まれ変わりとか……」
「ない、ない」
「どうして？」
「だって、秀吉とねねの間には子供なんていなかったわけだし……」

笑ってしまうことに、夢の中で僕は豊臣……夢の中ではまだ羽柴と名乗っている秀吉とその妻であるねねの子供だった。

「知られてないだけで本当はいたかもしれないでしょ。秀吉とねねの子供ってところだけ抜けば、矛盾点はほとんどなかったし……もしほんとだったら……もしかしたら、生まれ変わりとかかも」

そう思うとどきどきするんだよねぇと栞は笑う。

「でもさ、例えばあの子の存在が本当だったとして……今、記録に残っていないっていうことは、早くに死んだのかもしれないよ。もしくは、何かのドラマとかを見てそれが記憶に残っているのかも」
「調べた限り秀吉とねねに実子がいたっていう設定のドラマや映画ってないんだよ。……早死説はありそうだけど……」
「もしくは、僕の空想かも」

笑って言う。

「それこそありえないよ。……幸也、超現実主義者だもん！そんな空想できるはずないって」
「ひどいな、栞。僕だって空想くらいするよ」

夢の話を僕のただの空想や妄想だと笑い飛ばさないのは栞だけだ。
もしかしたら、僕の失われた幼少時の記憶を取り戻す手がかりになるかもしれないと、二人で僕の夢を詳しく検証したこともある。
……記憶のないことは、僕のコンプレックスの一つだった。
空白の記憶……どんなに幸福の中にあってもそれがまるで刺のように突き刺さっていた。
それが気にならなくなったのは、栞と結婚してからだ。記憶などなくとも栞は僕を愛してくれているのだという自信が持ててからは、我ながら現金なことにまったくどうでもよくなった。

当時の副産物として、僕と栞は異様に戦国時代に詳しい。
栞の父である僕の恩師、上月教授の趣味が時代劇鑑賞であり、上月家には膨大なビデオコレクションと膨大な資料・小説コレクションがあって調べるのに不自由しなかったせいもある。
家紋をみればどこのものかすぐにわかるし、主だった家系図や系譜はすぐに頭に浮かぶ。年表だってかなり細かく覚えている。まあ、小説などのフィクションも混じっているし、後世に書かれているものだから正確だとは言い切れないものもあるだろうけれど。

「いいの。私は生まれ変わりに1票」
「……生まれ変わりなんて信じるの？」
「また幸也に会えるなら信じる」
「栞……」
「これだけ幸也のことが大好きなんだもん。きっと何回生まれ変わっても私は幸也と出会うから」
真面目な顔で栞が言う。
「……そうだね」

心がふわりと温かくなる。栞はいつも僕を救ってくれる。

「最初に会った時、やっと会えたって思ったの。きっと幸也を待ってたの。……幸也のあざを見た時に、なんでかな……間違いないって思ったの」

僕の肩には変な形のあざがある。瓢箪の形にも見えるそれは普段はシャツの下でわからない。どうやら最初からあったらしく、記憶喪失の僕の身元を照会するための記録にも載っていた。

「目印だったのかな」

「……そうかも」

「じゃあ、栞の目印のそのあざだね」

そっと栞の手をとる。

左手首、普段は時計で隠れているそのあざは花の形をしている。

「次に生まれ変わっても、僕とまた結婚してくれる？」

そっと僕はそのあざに唇をよせる。

「勿論。……ちゃんと見つけてね」

こくりと栞がうなづいた。

「うん」

僕はぎゅうっと栞を抱きしめた。

他愛のない約束だった。

生まれ変わりとか、魂とかそういうものを信じているかと聞かれたら、たぶん僕は信じていなかった。

僕が信じていたのは栞で、栞が信じているものだから僕は信じて

いた。

世界中のすべての人が嘘だと言っても、僕は栞の言葉を信じるだろう。

第一章　幸也（2）

「今日はどこかに出かけるの？」
「あとでスーパーに買い物に行くつもり」

二人暮らしのマンションは、２ＬＤＫ。川側に立つこの中古マンションは眺めが気に入って決めた。まだローンは残っているが、仕事関係のコネのおかげでかなり格安で購入できた。
ここは、栞と僕のささやかな城だった。
生成りとアイボリーを基調にしたインテリア……新婚旅行で行ったバリのホテルを真似している。築１８年とやや古いが管理はしっかりしていて、手入れもきちんとされているし、何よりも最寄駅からは徒歩五分というアクセスの良さがとても便利だった。
徒歩圏内にスーパーが３軒もあって生活環境も悪くない。マンションに戸数分の駐車場はなかったが、都内に住んでいる以上、車はほとんど必要なく、僕ら夫婦はどちらも運転免許を持っていなかった。

「僕も途中まで一緒に行くよ。本が届いたって連絡があったんだ」
「うん」

大学は以前から興味のあった建築科に進んだ。ゼミで選んだのは、中世の城郭建築。卒論は『安土桃山時代における建築技術の粋ー大阪城と聚楽第』だった。その後、大学院に進み、講師を経て、去年、昇進して准教授と呼ばれる身分になった。昇進スピードとしてはわりと早いほうだ。
現在は、中世日本の城郭と海外の城郭との比較研究をしていて、某大手ディベロッパーの研究所の顧問にも名を連ねている。

栞は専業主婦で、今はベランダの小さな畑に夢中だ。これは前の持ち主が作っていたもので、ベランダの一部に土をいれて畳二枚分くらいの小さな家庭菜園になっている。今は枝豆とナスときゅうりとトマトの収穫期で、毎日それらの野菜が工夫を凝らして食卓にのぼる。

「そういえば、滝口さんがたまには道場に顔を出して下さいって」
「……そういえば最近行ってないや」
「でしょ。たまには道場で汗流してくるといいよ」

杉原の家に引き取られてから、義父が道場の師範代だった関係で剣術をはじめた。
最初は竹刀を使う剣道だったが、中学を卒業した頃から剣術へと変わった。自身を律することのできる剣が、僕は好きだったし、鍛錬の為に今も月に何度かは道場に行くことにしていた。

「……それもいいかも」

本屋の帰りに顔を出そうかと、考える。

「そしたら、道場にお迎え行くね」
「いいよ。少し遠いし」
「いいの。久しぶりに袴姿の幸也、見たい」
「……そんなの」
「いいの、格好いいんだもん！」

はっきりきっぱり言い切る栞に僕は俯く。
人間、こうも真顔で褒められるとどうしていいかわからないものだ。ましてや、相手が妻なのだからもっとどうしていいかわからな

い。
　そんな、どうしていいかわからない無言の中で、シンプルな月見うどんと一口サイズの豆いなりを盛り合わせた昼食をとった。豆いなりはいろいろな具があって、食欲をそそる。

　僕らは互いに無言でいても全然苦にならないで過ごせる仲だった。互いの呼吸を合わせるようにひっそりと二人で寄り添っていられればそれだけで良かった。
　栞が準備している間に僕が皿洗いを済ませると、僕らは手をつないで出かけた。

「３０００円以上買えば、宅配してもらえるから、お買い物終わったら道場に行くね」

　今日はね、トイレットペーパーとか洗剤も買うからそれくらいすぐいっちゃうんだよ、と栞が笑う。

「……見ててもつまらないでしょ」
「そんなことないもん。……幸也が剣道してるの見るの好きだし」
「剣道というより、剣術」
「何が違うの？」
「竹刀は使わないだろ」
「……そういえば、そうだね」
「刃こそついていないけど、あれは本物と同じ重さがあるんだ」

　通常より三寸ほど長い太刀で抜刀したり振るったりは、それだけ力が必要だ。だが、それさえ克服できれば長いというのは必ずしも不利なことではない。
　通常の抜刀術は一撃必殺。抜いた刀をかわされればそれでおしまいにょうなものだったが、僕が学んだ流派は一の太刀としての抜刀

術があるものの、抜刀後も二の太刀、三の太刀と続く実戦を重視した剣術だった。まあ、この平和な世の中で実戦なんてあるはずもなかったが。

「ふーん。幸也が剣術するのって、夢のせい？」
「どうだろう。まあ、影響はゼロじゃないと思うよ」
「……今の幸也が夢の中にいったら、きっとすごくいい若様になるね」
「それはわからないよ」

子供の頃しか夢に見たことがなかったし、そもそも現代人が戦国時代にいっても何もできないと思う。実戦を重視した剣術とは言うが、正直、自分に人が斬れるとは思えない。

「あ、じゃあ、買い物したらいくからね」

スーパーの前で立ち止まる。

「うん。……また後で」
「今日のお夕飯は何がいい？」
「……そうだな。中華、かな」
「わかった。任せて」

栞の作るものは何でも好きだったけれど、特にすきなのはビーフシチューと餃子だった。
栞の作る餃子は、羽つきのカリカリで中に肉汁がたっぷりで閉じ込められている。肉ががっつりでとろとろのビーフシチューは、いろんな旨みがいっぱい凝縮されたデミグラスソースが絶品だった。

スーパーの前で僕らは別れた。

僕はずっとそこに立って栞が中に入るのを見送った。
入り口でそれに気付いて、笑顔で手を振る栞に手を振り返す。どこかの子供がそれを真似して手を振っているのを見たら、何だかむしょうにはずかしくなって足早にそこを立ち去った。

それが、僕が笑っている栞を見た最後だった。

僕の世界は、突然、真っ暗闇に塗りつぶされた。
道場に来る途中で、信号無視のトラックとスピード違反の乗用車の事故に巻き込まれた栞は、物言わぬ亡骸となって病院の霊安室に横たわっていた。

この日、僕は栞……僕のたった一人の家族を、最愛の妻を、……僕の世界のすべてを、失ったのだ。

第一章　幸也（3）

葬儀が済んで、僕は大学を辞めた。
何のアテがあったわけではなく、ただもう栞のいない生活を送ることが耐えられなかった。
栞の両親や、同僚達は何度も引きとめたが、もうどうにもならなかった。栞のいない世界で呼吸をしていることすら苦痛だった。

だが、死を選ぶ事はできなかった。
そんなことをしても再び栞に会えるとは思わなかったからだ。

僕はただの抜け殻だった。
ただ、食べて、寝て、息をしているだけの抜け殻にすぎなかった。
栞がいなければ、僕には何もなかった。
朝、目覚める。
家庭菜園に水をやる。
ゆっくりとミルをひき、コーヒーを落とす。
コーヒーは、栞の好きだったキリマンジェロの荒びき。デミカップではないけれど、小さ目のカップに濃い目にいれる。
毎朝二杯分いれて、一杯を栞の写真の前においた。
それから、八枚切りのトーストを1枚食べながら新聞を読んだ。
気が向けば、目玉焼きやハムをつけることもあったけれど、だいたいはバターをぬったトーストだけということが多かった。
時々、近所のパン屋にトースト用のパンを買いに行く。朝の7時ちょうどに買いに行くと焼きたてが買える。それは、近所の得意客に対するその店のサービスで、栞がいる時は、週に三回買いに行かされていたが今は一回だった。
新聞を読み終わり、朝食を終えると書斎に行く。

何度目かのボーナスで買ったリラックスチェアに身体を横たえ、僕は本を読み始める。
栞は読書日記をつけていて、それはノート5冊分にもなっていた。僕はそのノートに載っていた本を一冊ずつ読んでいた。……栞の足跡を辿るように。
時々、思い出して、二人で見た映画を見たり、後で見ようといって録画していたＮＨＫのドキュメンタリーを見たりもした。

昼食を取るのはだいたい2時過ぎだった。
買い置きのそうめんかうどんかラーメンを作って食べた。具はあまり入っていないが、それで充分だった。
それからまた本を読んだ。
他にすることは何もなかった。
夕方になると週に一度、スーパーに買い物に行く。同じ道を辿り、同じスーパーへと向かう。買うものは毎回たいして変わり映えがしない。僕の料理のレパートリーはそれほど多くはなかったが、便利な世の中でインターネットでいろいろなレシピが検索できた。
そして、いつもと変わらない河原の道を歩く。春一番が吹いたとはいえ、まだ風は冷たい。

僕は、ただそこにいた。

そうしているだけでギリギリだった。
時がたてばどんな悲しみも癒されるのだというが、そんなことが本当にあるのか疑問だった。
そもそも、自分が悲しみの中にいるという認識が僕にはなかった。
僕はただ失われた空虚感の中でもがいていただけだったからだ。

ふと川面に目をやると白いものが見える。
何か違和感を覚えた。

「……誰か、助けてっ。子供がっ」

若い女の悲鳴にも似た叫びが聞こえる。

（……子供？）

「しおりーっ、しおりーっ」

子供の名を呼ぶ女の声。

女が呼ぶその名前に僕は反射的に反応した。ただ自然に走り出した。

駆けつけた川べり。流れは思っているよりも全然速い。

上着を脱ぎすて、飛び込んだ。

衝撃と冷たさに、一瞬、意識が揺らいだ。

飛び込んだ水は春先とはいえまだ冷たい。水の中ではまだ冬も同然で、しかも手足の動きは鈍い。それでも、僕は絶対に助けるのだと決めていた。

彼女と同じ名前の子供が目の前で失われるのには耐えられなかった。

流れに逆らいながら何とか泳ぎきり白い塊を捕まえる。それから岸へと泳ぎ始めたが、水の中での着衣は手枷足枷に等しかった。

片手でシャツのボタンをはずしながらも、岸を目指す。

頑張れという声援が岸から飛んだ。母親の声に助けに駆けつけた人々らしかった。

何度も水を飲んだ。自分がどれだけ自分を甘やかしていたかを思い知った。

（……明日から、運動しよう）

岸にたどり着き、手を伸ばした男に子供を渡したときにそう思った。

「捕まれ」

もう一本伸ばされた手に手を伸ばす。土木作業員らしい無骨な男は、大丈夫かと僕に笑った。僕は小さくうなづいた。川岸は護岸壁になっていて高さがある。自分ひとりではうまく上れそうになかった。

男の手に捕まり、護岸壁をのぼろうとして手が滑った。

握りなおそうとした無骨な手が、空を切る。

「おいっ」

本当に驚いた一瞬というのは声も出ない。

僕の身体は再び水に飲まれ……僕の意識はもみくちゃになった。

水の中で、ぼんやりとこのまま眠れたら栞に会えるのかもしれないと思った。

第二章　弥勒丸（1）

目が覚めて、最初に目に入ったのは見慣れぬ白木の天井だった。

（……死ななかったのか）

それが良かったのか悪かったのか、僕にはわからなかった。

ゆっくりと布団の上に起き上がる。

（……ここは、どこだ？）

ゆうに１０畳はある和室。床の間にかけられた軸は墨一色の山水画だ。誰のものとわかるほどの審美眼はないが、良いものだと何となく思った。墨の濃淡だけで描かれているはずなのに、そこには色があったからだ。

（病院のはずはないな）

襖にはさらりとした筆致で貝や蟹などが描かれている。何の意味があるのかはさっぱりわからなかった。

だいたい、和室の病院なんて見たことも聞いたこともない。

ふと、違和感を覚えた。

（……目線が違う？）

それから己の手を見、ぐっと拳を握り締める。木刀のタコも、ペンダコもないまだ柔らかい手。それは、僕が覚えているのよりもずっと小さく細い。

（……子供の手だ……）

自分の身体が子供のものなのだと認識する。だが、それがいまいち信じきれず、周囲を見回した。

鏡らしきものはなく、枕もとの少し離れたところに水盤があった。黒の漆塗りの水盤を鏡代わりにのぞきこむ。

「……う」

思わず奇声がこぼれ出た。

ぼんやりとした水鏡の中、そこに映るのは、何度も夢で見たあの子供の姿だったのだ。

思わず、頬をつねる。

（……痛い）

それから水盤に手を振り、水盤の中の子供も手を振っているのを見て、それがやはり自分の姿なのだと理解した。

よく見れば格好だっておかしい。幼い身体に身につけているのは、寝間着らしい浴衣にも似た白い薄物。パジャマではない。

（着物に下帯……なるほど）

つまりはこれは、やはりあの夢の中なのだと結論づけた。

（寝よう……）

そのままもう一度もぞもぞとかけられていた衾にもぐりこんだ。

ふかふかの綿がぎっしりつまった布団に薄く綿をいれた衾を頭からひきかぶる。悪くない寝心地だ。

目を閉じる。
身体は疲労を覚えているのか、意識がすぐに揺らぎはじめた。そのことにほっと安堵する。
（目が覚めればきっと……）
戻っているだろう。
あの息苦しい、どこにも僕の居場所のない世界に。

二度目の目覚めは真夜中だった。
（……おかしい）
一面の暗闇……またしても先ほどの見覚えのない天井が目に入る。
「……おかしい」
思わず口に出した。
喉が渇いているのか、声がかすれる。
やや高い子供の声で、心のどこかでその夢のリアルさに驚いていた。
夢ならもう覚めてもいいはずだった。

（いや、もしかして夢だったのは、あちら側なのだろうか……）

かざした小さな手を握ったり、開いたりしながら考える。

妻がいて、二人の生活があって……それは夢のように幸福な日々だった。永遠に続くと思っていた穏やかでささやかな日々……そして、一転してすべてが失われた無機質な世界。

「……夢……」

口に出して呟いてみると、何だか本当にそんな気がした。

「いやいや、わからんぞ……」

夢の中でまた夢を見ているのかもしれないと思い、もう一度横たわる。だが、おそらく身体は充分に睡眠をとったのだろう。目を閉じても一向に眠りに沈むことは出来ない。

（仕方がない……）

起きることにした。

ぐーっと腹が鳴る。

「……腹、減った……」

そう口にしたらもう一度きゅるきゅると腹が鳴った。夢の中でもこんなに腹は減るものなのだと知って驚いた。栞を亡くしてから、食べるということはただの栄養摂取でしかなかったので、こんな風に腹が減ったという感覚を覚えるのは久しぶりだった。

（……食い物探さないと……というか、誰か他に人はいないんだろ

うか……）

今の自分が、あの夢の中の子供なのならば……秀吉とその正室の間に生まれた一粒種のはずだった。もうちょっと大事にされてていいんじゃないだろうか？

こういう場合、廊下や襖の向こうの別間には宿直がいて、護衛や何かがいてもおかしくないはずだ。

（いやいや、夢の中だからな……所詮……）

これが僕の想像力の限界、というところだろう。

（栞に話したら、きっと喜ぶのに……）

そう思ったら、じくりと胸が痛んだ。

栞はこの夢の話を好んだ。

細かいところまで聞きたがり、栞に話すために僕は夢の中の記憶を何度も何度もなぞって細部を思い出した。

そのせいなのか最初からなのか、僕は一度見たものをだいたい忘れない。まるでビデオテープを巻き戻したり、カメラをズームアップしたりするように記憶を思い出すことができた。

これはある種の特技といえる。

大学の試験の時なんかにはだいぶ役に立った特技だ。

立ち上がろうとしたときに、障子に明かりがさした。

（お、誰か来た）

どうせ目が覚めないのなら、この夢の中を満喫しておこうと思った。

それは、もしかしたら逃避だったのかもしれない。でも、この時

の僕には必要な逃避だった。

がん、と障子が開く。

（乱暴だなぁ）

年のころは２０歳をいくつか越えたくらいだろうか。身体は大きいが顔立ちにはやや幼さが残るからもしかしたらもう少し若いかもしれないと思える青年が入ってくる。

青年は、手にしていた燭で慣れた様子で床の間近くの行灯に火をいれる。

「おい」

腹減った、と言おうとして、青年のものすごい表情に思わず言葉に詰まった。

何というか……最大級の驚きというものを表情にしたらこんな顔になるんじゃないだろうか。

ムンクのあの有名な絵にも似ている。

「弥々さまっ。お弥々さまーーーーーーっ」

腹に響く重低音。三大テノールも真っ青の声量に思わず耳を塞ぐ。

青年はまるで突撃でもするかのように抱きついてきた。

衝撃で一瞬呼吸困難を引きこした。

本人は抱きついているつもりなのかもしれないが、体格差からすると何というか……小さな子供がぬいぐるみのティディベアを抱きしめ潰してているような、そういう図にしかならない。

この場合、僕がティディベアだ。

「……く、くるしい」

むさ苦しいし、暑苦しい。

「お弥々さま、良かった。どこぞ、痛くはないですか？具合はいかがですか？」

青年の顔は、ぐしゃりと歪み泣き顔になる。

必死だった。そして、滑稽なほど真剣だった。

「……腹が減った」

「……そ、そうですよね。一月も寝てたんですから、腹が減りましたよね」

（一月も寝てたって……何だそれ）

「おい、市松、こんな夜中に何を大声あげている。うるさいではないか……」

うるさいことには僕も同意する。だから、こいつを引き剥がして欲しいと思って、僕は様子を見に来たらしい男をジロリと睨みつける。

やってきた青年もまた、僕を見て絶句した。

どこか神経質そうな面差し……痩せぎすの身体はひょろっとしている。

（なんだ……？）

俺は青年を見上げ、凍りついたその姿に首を傾げる。

「……や、弥々丸さま……」
「うん？」

それが己の名であることを僕は知っていた。
正式には、弥勒丸というのだが、あまりにもあんまりな大仰な名前なので、弥々丸とか弥々と呼ばれることが多いのだ。
ぺたん、と青年は座り込んだ。

「弥々丸さま……良かった……」

市松と呼ばれた青年はおいおいと泣き出し、後から来た痩せぎすの青年も目元を押さえる。
その光景を目の当たりにした僕は、ただ呆然とした。
大の男が目の前で泣き出したのだ。
呆然とするしかなかった。

第二章　弥勒丸（2）

「弥々や、気分は悪くないか？どこも痛くないか？」
「……ほら、おまえの好きな甘葛の栗や。たーんとお食べ」
「おお、鮎の塩焼きもあるでな。どれ、骨とってやろうか」

呆然が行き過ぎると唖然となるのかもしれない。僕は何が起こっているのかいまいち理解しきれないで、ただただ何度も目をしばたかせる。
真夜中だというのに、明かりはこうこうと灯され、目の前には次々へと膳が並べられ、まだ運ばれてこようとしている。

「弥々や、どうした？他に何か食べたいものがあるんか？」

何でも作らせるで、と父は言う。

（父……）

そう。目の前のこの剽げた風情の小男は、紛れもなく父なのだ。
理屈ではなく、単に感情というのでもない。ただ、己のすべてでそう理解していた。

「……おっかあの味噌汁が飲みたい」

するりと自然に口をついて出た。

（……ああ、そうか……）

夢なのだと思った。

「味噌汁かい？どれ、すぐに作ってこようね」
涙を拭きながら立ち上がるのは母だ。
「豆腐とねぎがいい」
「わかったよ。弥々は豆腐が好きだもんねぇ」
「うん」
うなづくと、母は嬉しそうに笑った。
ふっくらと暖かな印象のする美しい人だった。この時代で言うのならば、年増と呼ばれるのかもしれないがその柔らかな雰囲気が不思議と年齢を感じさせない。
僕は父を父であると思うのと同じくらい、この目の前の女性を母なのだと感じた。
戸惑いがないわけではない。けれど、それは簡単に飲み込めてしまう程度のものでしかなかった。
座敷中の人の注目を浴びながらも腹の虫の催促には勝てず、消化のよさそうな粥を口に運びながら、骨をとった鮎に箸をつける。
（俺は夢を見ていたのじゃな……）
あの美しい女と出会い、それを失う、長い長い夢。
夢であるはずなのに、じくじくと身体の真ん中が痛みを訴えている。
（不思議じゃな……夢だというのにこんなにも胸がいたむ）
時として、のたうちまわりたくなるような痛み。

（『彼女』がいない）

ただ、それだけなのに、こんなにも『自分』が軋む。

「こっちはお弥々の好きな甘い玉子焼きじゃ。豆腐のあんかけもあるでな」

男は愛嬌のある笑みを向け、どんどんと皿を僕の前に押しやる。

次から次へと料理が並べられた。

「……おっとう」

すんなりとそう呼べた。口にしたら、他の呼び方はないように思えた。

「ん？なんじゃ？」

「……弥々は、夢をみとった」

「夢？」

「うん……長い夢じゃ……」

「どんな夢じゃった？」

男は笑う。

この男が、夢の中の歴史で知ったあの豊臣秀吉なのかの確証はない。

だが、この男は確かに今の自分の父だった。

（ならば、それだけでええ）

「……おっとうと、おっかあがおらんかった」

「何と！わしらがおらなんだか」
「うん。……それで、俺は他の違う家の子になってな……ずっと苦しかった」
「可哀想になぁ」

父は夢の中の話だというのに、本気で涙を見せる。

「でもな、可愛い子がおってな。その子を嫁にしたぞ」

幸せやったんや、と言うと、父は笑った。
痛みが少しだけ薄らいだ。

「そうか、そんな可愛かったんか？」
「うん。……優しくて、可愛くてな……でも、死んだ」

再び、ぐさりと何かが刺さった。
どくどくと血が流れる。
死んだと言ったときの俺の声音がよほど冷ややかに響いたのだろう。父は、そっと俺を抱きしめる。そのぬくもりが慕わしく、そして、大切に思える。

「……死んでしもうたんか」
「うん。……でも、俺は、あの子だけが好きや」

（例えあれが夢だったとしても、栞だけが好きだ……）

「そうか……」

父の脳裏に浮かんだ面影が誰だったのか僕は聞かない。この父にそんな風に甘酸っぱい顔をさせるのは母でないのだと何となくわか

っていた。

「苦しゅうて……苦しゅうて……どうしようもなくて……そしたら、目が覚めた」

「……ほうか」

父はぎゅうっと抱きしめる手に力をこめる。

「……これが、胡蝶の夢って奴なんやろか」

（でも、夢やとしても、この喪失の痛みは真じゃ）

あちらでは今の自分を夢と思い、こちらではあちらの自分を夢と感じる。

では、真実、現であるのはどちらなのだろうか。

「こちょうのゆめとは何ぞや？」

「夢か現か……現か夢かわからん心持ちいうやつや」

「ほうか……弥々は難しい言葉を知っとるんやな」

「俺は、夢ん中でいっぱい勉強したんやで、おっとう」

抱きしめられていると安心した。

自分が幼い子供に戻ったみたいで……覚えのない幼児期を取り戻したような気がした。

「ほうか……どんな勉強しとったんや」

身体のわりには大きな手が、頭をなでる。

「城の縄張りの勉強をしとった……」

「ほお。城か」
「いつか、おっとうの為に俺が城を建ててやるからな」
「そりゃあ、ええな」
「それで、おっとうとおっかあと……あの子をみつけて、皆で暮らすんや」

抱きしめる腕が小さく震えた。

「……お弥々よぉ」

声が湿っている。その声音に、何とも形容できない、温かみを感じた。

「……おまえが目が覚めてくれてほんに良かった」

……父は静かに泣いた。
いつの間にか戻ってきていた母もかたわらで泣いていた。
ぼんやりとそれを目の端にとらえながら、何だか胸がじんわりと暖かくなっていた。

そして、僕は思った。

（……ここでなら生きていけるのかもしれない）

父と母のいるこの世界でなら。

第三章　父（1）

「……おっとう」

ちょこちょこと駆け寄ってくる小さな影。その後ろを小姓達が慌てて追いかけている。

一事はこの手の中から失われたお弥々の元気な姿に胸がつまった。あれから一年が経つというのに、未だにその姿を見るたびに涙がこみあげそうな気がする。

「おお、お弥々か」

飛びついてくる小さな身体……同じ年齢の子供に比べれば小さいかもしれないが、わしもそれほど大きくはないので仕方がないだろう。

剣術に興味があるようだったので、半年ほど前に小太刀の名人だという者を師につけてやったら、筋良いと褒められた。

城主の息子だから世辞半分にせよ、褒められるのは悪くない気分だ。自分が褒められるよりも息子を褒められたほうが何倍も嬉しい。

ちょこちょことお弥々に一緒についてきてぺこりと頭を下げるのは半兵衛の息子の吉助だ。半兵衛とわしの間でいまさら人質でもないやろ言うたら、弥勒丸様の傍においてご薫陶いただきたいと言うので、年齢も近いから遊び相手として引き取った。

互いに何か通じるものがあったらしく仲良うしている。二人つれだってちょこちょこと走り回っている姿は何とも愛らしいものだった。

（お弥々はわしの宝じゃて……）

目にしているだけで頬が緩む。
結婚して3年くらいの間におねは二度ほど妊ったが、貧しい生活の中での無理がたたって流れてしまった。
手をつけた女達も二人ほど子供を産んだ者がおるが、どの子も三年とたたずに死んだ。
側室になおした南の産んだ石丸が五歳まで育っていたが、病弱な子でこれも育たぬだろうと密かに諦めていたところ、３０になろうかという高齢で懐妊したおねが生んだのが弥々丸だった。
おねが子ができたのは己の守り本尊にしている弥勒菩薩のおかげだと言うので『弥勒丸』と名づけたのだが、わしの子に仰々しい名はいかにも似合わなかった。
その為、わしは『弥々』とか『弥々丸』とかと呼び、いつしか皆もそれに習うようになった。

「どうしたのだ？何かあったか？」
「おっとうに昼飯をとどけにきたのだ」

小さな胸をはる様子も何ともかわいく、わしの頬は自然と緩む。
この子はこれまでの子と違い、健やかな子だった。子供らしくすぐに熱を出したりするものの、三日もすればいつもケロっと治っていた。
今までのほかの子らも可愛いは可愛いと思ったが、お弥々を見るともっと他の……言葉にはできない感情がこみ上げた。どういうわけか、これは石丸には感じた事の無い気持ちだった。

（そのお弥々が……）

神隠しにあったのは一年前だった。
神隠しと称してはいるものの実際は何というべきなのかわからな

い。ただ、わしらの前から一度奪われ、そしてまた戻ってきた。
戻ってきたお弥々を見つけたのは、失われて三月を数えても諦められなかったおねで、小一郎は義姉上の愛情がお弥々を取り戻したのだと言った。
見つけたときは酷い高熱で、そこからまるまる一月は寝込み、このまま目覚めぬやもと誰もが危惧を抱いていたが、お弥々は無事に目覚めた。
今ではあの時のことが嘘のようにすっかり元気に飛び回っている。
見た目が愛らしいのも勿論だが、お弥々は賢い。これは単なる親ばかではない。
まだ幼いはずなのに、時としてわしらはそれを忘れる。口ぶりもとてもしっかりしていて、話をしているだけで楽しかった。

「お弥々は、昼メシはもう食うたのか？」
「食った。おっかあの作ったこんぶの佃煮とごまのむすび飯や。うまかったぞ。……これ、おっとうと小一郎おじの分だ」

抱えている風呂敷包みをわしに差し出す。
お弥々はかなりのいたずら坊主で、少し目を離せばどこにいったかわからないほどに、あちらこちらを元気に飛び回っている。
交代で守りをしているわしの小姓たちの苦労は絶えないようだ。とはいえ、小姓らはお弥々に振り回されるのを楽しんでいる風もある。
本当に神経をすりつぶしているのは神経質な佐吉だけだろう。その佐吉ですら、お弥々ににこりと笑顔を向けられて「ごめんな」と一言言われれば何も言えない。
わしや小一郎の子供の頃を考えても、似ているところはあまりない。

（……ああ、そうじゃ……お弥々は上様に似ておるかもしれぬな）

上様　――　我が主たる信長様は、常人では考えつかぬような着想でいろいろなことをなさる。

顔や見た目ではない。その、普通とは違うその閃きの部分がよく似ているように思う。

お弥々は、サルだのはげネズミなどと言われるわしとはあまり似ていない。どちらかというとおねよく似ていて、目元や鼻筋がそっくりだった。

わしと共通しているのはその目の色だ。目玉というのはよく見ると茶色い円の中に黒い丸い中心部分があるものだが、わしと小一郎はその茶色の部分が青みがかった灰色だった。

これはかなり珍しいらしい。最初にこの目の色に気付いたのは上様のご側室である吉乃さまで、何かの拍子に上様に知れ、それをおもしろがった上様が見たいとおおせになって召し出されたのが草履取りにしていただくきっかけとなった。

これは姉のともと弟の小一郎とは同じだが、父親の違う妹であるさとは違う。上様曰く、これはわしらの父親の血に出る特徴なのだろうということだった。

子ができた時、上さまはいつもその目かどうかをお聞きになった。

（そういえば、お弥々が元服したら自分の娘を嫁にくれてやるなどとおっしゃっておった……）

上様のことだからもう忘れているかもしれないが。

わしの小姓らがお弥々に対する様子はそのまんま、上さまに対するわしのようだ。

（わしも、上様に褒めてもらいとうて……）

それだけでここまで来たようなものだった。
思えば随分と遠くに来たものだと思う。
百姓の子が、今や北近江十三万三千石の城主様だ。

「……殿？どこかお加減でも？」

茶を入れた竹筒をさしだした佐吉が怪訝そうに呼ぶ。

「あ、ああ、いや何ともない……うん、うまいな」

わしは結び飯にかぶりついた。
今日のお弥々の当番は市松と佐吉だ。
この当番の組み合わせを決めたのはお弥々で、その人選の妙にわしも小一郎も感心した。お弥々は智謀を誇る近江出身の小姓らと武勇を誇る尾張出身の小姓らから一人ずつを選んで当番を組み合わせるようにしたのだ。
あまり仲良うないそれぞれの小姓らだったが、お弥々は様子を見ながらそれを適度にひっかきまわし、互いに助け合わねばならぬような事態をたびたび作りだしている。
そして、ことあるごとに角付き合っていた者らにそのたびに言葉を尽くして諭したり、教えたりしながら双方の理解を深めていった。そのせいだろう、昨今はだいぶ衝突も少なくなってきたようだった。
そもそも、大概のいさかいというのは理解不足が原因だ。互いによく知り合えば、もめ事はだいぶ少なくなる。

わしはお弥々に目をやった。
吉助と何やらひそひそ話している様子を見ると、またぞろ何やらしでかすつもりらしい。市松と佐吉もちらちらと気にしている。この二人は仲が悪いので、してやられることが一番多いのだ。

お弥々は、この年齢の子供とは思えぬ判断力と思慮深さを見せる。智謀自慢の近江の小姓らも、武勇自慢の尾張の小姓らも、皆、お弥々の前では素直になる。神隠しにあっていた時の夢の中では３０を数える大人の男だったと言うのだから、それも道理だった。

（何せ、あの半兵衛がほんに感心しとったしな……）

羽柴の家の知恵袋、最高の軍師たる竹中半兵衛が、このお弥々の判断力に一目も二目もおく。半兵衛は、常々、羽柴の家が世継にお弥々を得たことは幸運じゃと申しているとも漏れ聞く。

確かにお弥々のような跡継ぎを得たわしは最高の幸せ者じゃと思う。

だが、それは何もお弥々が賢い子だからというわけではない。うまくは言えないが、お弥々がどんな子供であってもわしはお弥々がお弥々である限り、愛しく思うのだろうと思える。

（お弥々の心は大人のそれだ）

それでいながら、子供の部分も切り離しきれない。お弥々はそれとうまく折り合いをつけている。子供扱いされても、大人扱いされてもたいして気にした風もなく、当人はいたって普通だ。

そして、知識を誇るでもなく、殊更おかしなところがあるわけでもない。

それでも時々は辛くなることがあるのだろう。ひどく甘えてくることがある。

わしはそういう時に甘やかしてやることのできる父親でありたいと願い、努めていた。

第三章　父（2）

「弥々さまも何ぞ召し上がりますか？」
「いや。茶、くれ」
「はい。どうぞ」

吉助がかいがしくお弥々の世話をしている。
お弥々のただの遊び相手のつもりだったが、幼いながらも吉助は既に小姓としての役目を充分に果たしている。
勿論、できぬこともたくさんあるが、努力している様子はとても感心する。勉強も剣術も弥々と一緒に努力しており、半兵衛の息子らしく筋は良いという。

（じゃが、やっぱりお弥々がいっとう可愛いのぅ）

わしやおねの話をとても聞きたがり、一緒にいたがる。
わしが城にいて政務をとったり陳情を聞いたりする時は、常にわしの膝にいてにこにこ笑っている。つまらないだろうと問えば、「おっとうといるだけで嬉しい」という言い草だ。それも決して子供の賢しさではない。心底そう言っているのがわかる。
親馬鹿がすぎると言われるかもしれぬが、たった一人の我が子にそんなことを言ってもらえるというのは冥利につきることだ。

わしがお弥々をすきなのと同じくらいお弥々はわしを好いておる。わしはそれを知っている。お弥々もまた知っている。
だから、視線が合うとわしらはいつもくすぐったい気分になり、互いに笑みをかわす。
この時に互いに通い合う柔らかな感情やぬくもりを親子の絆というのではないかとわしは思う。……それは、幼いわしが欲しいと思

いながらも与えられなかったものだ。
わしは、それをお弥々を得ることで手に入れた。
お弥々だからこそ与えてくれたものなのだと思う。

「殿、お弥々さまは相変わらずやんちゃなようで……」
「うむ。この間など、城下の明かりが見たいと夜中に寝床を抜け出すものだから大騒ぎじゃ」
「……誰も気付かなかったので？」
「吉助だけはいつも一緒じゃな」
「……一緒に寝ていたので？」
「まさか。吉助とはちゃんと示し合わせておる。宿直を引き剥がすための陽動は吉助の役目じゃ。……もちろん、後で合流しておるがな」

はぁとわしは嘆息する。

「何とも息のあった主従で……」
「良いのか悪いのか……」

苦笑してみせるものの、本気で困っているわけではない。

「良いではありませぬか。……吉助はお弥々様を絶対裏切らないでしょう。そういうものがお側にいることは安心です」
「……そやなぁ」

小一郎はお弥々と吉助を見ながら小さく笑う。確かに微笑ましい一対だ。

「お弥々様がおれば殿も安泰です」

この弟はいつも殊更わしに丁寧だ。人目のあるところではわざと『殿』と呼び、『お弥々さま』と呼ぶ。
わしの実弟であり、無二の股肱であり、わしにとって最も頼りにする補佐役である小一郎がそうやってわしらを上に置くことで、この羽柴という成り上がりの家においてもわずかな権威と上下関係とが生まれる。
小一郎があえてそう気を配っているのをわしは知っているし、それを有難くも思っている。その気遣いが、わしの至らぬところを補ってくれているのだ。
だが、小一郎があまりにもわしに丁寧に接するので、わしと小一郎は父親が違うという噂が流れてもいたりもする。小一郎はそれを否定しない。その方が都合がいいからだ。
この弟の思慮深さは、我が家を安泰にせしめている大きな要因の一つだ。

「あ、小一郎叔父、のりが全部についているのは小一郎叔父の好きな梅干やぞ」
「おお、義姉上の梅干か……それは有難い」

小一郎の頬が笑み崩れている。小一郎にも子がいない。ゆえに、お弥々がわが子のように可愛いといつも言う。
先頃、お弥々が寝付いていたときは、近くの自社仏閣に病気平癒の加持祈祷をさせたらしい。神仏の助けなどで病が治るか！というのが小一郎の持論で……この弟は変なところで頑固な現実主義者なのだ……自分の為は勿論のこと、わしの為にもそんなことをしない

のだが、弥々のことになるとどうやらタガがはずれるらしい。
お弥々もまた小一郎には懐いていて、小一郎を見るといつも嬉しそうにこにこする。

「……おっとうと小一郎叔父は、そろそろ、また播磨に戻って戦じゃなあ」

大人びた口調で溜息をつく。

「そうじゃな」

播磨は豪族や小大名が入り混じる難しい土地だ。数年前からずっと謀略の手をのばしているものの一朝一夕にはどうともしがたい。

「なんぞ、策はあるかの？」

わしは面白半分に問いかける。

「ないわけではないけど、机上の空論になりかねんもん」
「きじょうのくうろん、とは、何ぞ？」
「理屈倒れっちゅうことや。現場を知らん俺が言うても説得力ないやんか。それに、細かいことをここで言うても状況次第で変わるもんやし……」
「そら、そうや」

数え七つとは思えん頭のめぐりの良さにわしは嬉しくなる。まあ、夢の中では三十を過ぎた大人の男であったのだと言うのだから、それほどおかしなことではあるまい。

「……あのな、人の心を、獲るんがええと思う」

おっとうの得意技や、とお弥々は笑った。

「人の、心か」

「そうや。おっとうは上様の部下じゃが、上様とは違うということを播磨の人に知ってもらうんが必要と思う」

「ふむ」

わしと小一郎は、お弥々の言葉に耳を傾ける。

「上様のなさりようは苛烈じゃ。新しい世を拓くにはそれが必要じゃろうと思う……でも、ただの人にはそのなさりようは恐ろしいこともあるでな。叡山の一件かて耳に入ってるやろうし、織田は皆恐ろしいと思っとるはずや。だから、おっとうや小一郎叔父は、織田家の人間やけど、ちぃっと違うぞと皆に知ってもらうのがええと思う。そん時に百姓の出やというのは都合がええな」

「なんでや」

正直言って、わしは百姓の出であることを負い目に思っている。身分低きことをさんざんバカにされてきたし、そのことを隠したいとも思っているのだ。

「だって元は百姓や。武術はそれほど得手やないのや言えば、それはそうやろうと思われる。恐ろしげな織田の家中にもそんな人間もおるんやと思われれば、何やこれは違うかもしれんと思ってもらえるかもしれん」

「それはそうやけど……」

「おっとうは百姓の出やいうことが恥ずかしいと思っとるかもしれんが、そんなことはない。だって、考えてみるとええ。どんな高貴な血筋も、最初は成り上がりやで」

お弥々は、にぱっと笑みを浮かべてあっさりと言う。

「上様の織田家は守護代の分家じゃ……だが、そのそもそもその守護代や守護のお家かて、元は土豪や百姓に毛の生えた程度の侍でしかない」

どのような名家であろうとも、確かに家を興す最初の一人はただの人であろう。

「それが出世し、代を重ね……織田家にいたっては、信長様という殿様を生み出すことで、今になったんじゃから……」

何も殊更、恥じることはないであろ、とお弥々は言う。

「お弥々……」

気負うでもなく、さらりと言われた言葉は、不思議とわしの心にすんなりとしみこんだ。

それは、小一郎にも同様だったようだった。その顔が晴れやかに輝いている。

「わしや小一郎が羽柴の家を興す……そして、お弥々やその子の代になれば柴田殿や丹羽殿のような普代の衆と肩を並べ……代を重ねりゃあ、それ以上になるかもしれんというわけやな」

お弥々は不思議な笑みでうなづいて口を開く。

「羽柴の家は成り上がりや。俺はそれを恥ずかしいと思わん。だから、むしろそれを利用すべきや。播磨の者は古い血筋を誇っとるや

ろ。じゃからそころくすぐってやればええ。『ぜひとも教えを乞いたい……わしらのような百姓あがりには貴殿のような名族の手助けが欲しいのや』言えば、わかってはおっても悪い気はせんやろ」
「舐められへんやろか？」
「そんならそれだけの奴やいうだけじゃ。……そういうのは、おっとうの得意やろ」
「くすぐってやるのやな」
「そや。……俺も一緒に行けると良いんじゃがな」

こんなに小さいと戦場では何もできん、と不服そうに口を尖らせる。

「そないなこと気にせんでええ。弥々はな、病になどならんで大きゅうなってくれればええんじゃ」

そっと頭を撫でる。多くを望むつもりはなかった。ただもう、無事に育ってくれればそれだけで良かった。

「そうじゃ。……弥々丸はたくさん勉強もしとると聞いた。半兵衛が感心しとったが、無理はせんでええのじゃぞ」

小一郎も口を添える。
あの己の才に自信を持ち、誰もがそれを認めている男は、お弥々を対等の相手と扱っている節がある。さほど言葉を重ねているという風はなかったが、互いに認め合うところがあるのだろう。
「大丈夫じゃ。……それに学問はな、夢の中でもいっぱいしたのじゃ」

だから、思い出してるようなもんじゃ、と弥々は軽く肩を竦めて

みせる。。

「……そないにたくさん勉強したのか？」

自身、かなり勉強家な小一郎が真面目な顔で問うた。

「うん。……人にも教えとった」

こともなげに弥々は言う。それはわしも初耳だった。

「……人に、何を？」

「教えとったのは建築いうて、城の縄張りのことや、材料のことや……そういったことだな。でも、勉強は他のこともいっぱいしたんじゃぞ」

「他のこと？」

「そうじゃ。……算術や書やそういったことやな。漢籍や古い物語なども学ぶし、異国の言葉なども学んだな」

「異国の言葉……」

「……書は修練である程度までは上手うなる……夢の中でも修練しとったしな。あとは、ただ、心じゃ」

強き心の時には強い字が、弱き心の時には弱き字が書けると、弥々は言う。

小一郎はその言葉に目をしばたたかせ、それから深々と溜息をついた。これは、この弟が本当に、心底、関心した時だけの癖だ。

「弥々丸は、ほんまにたくさん学んできたのじゃの……」

「うん。……まあ、焦っても仕方ないからの。今の俺にできることを頑張る。留守の間、おっかあとおばあの事は心配せんでええよ」

「……お弥々は頼もしいのう」

わしはくしゃりと頭を撫でた。
此度の戦は総力戦であるからして、この長浜の城に留守居の兵はほとんどおかない。小一郎のおかげで領内はよく治まっているので一揆などということもないだろうが、それでも留守居は誰にでもできることではない。
だが、この子がいるのだから大丈夫だと思う。まだ幼いが、弥々は既に一人前の男だった。

「せめて留守くらいは守れんとな」

やわらかく笑う。
この子の笑顔は周囲を明るくする。
わしは、こうしてお弥々が笑っていれば、何もかもが大丈夫だという気がしていた。

第四章　吉助（1）

「よいか、そなたは夏が終わったら弥勒丸様のお側にあがることになる」

父が僕にそう告げたのは、天正6年の夏のことだった。

ほとんどを播磨の陣中に在るとはいえ、上様への報告などで安土を訪れる行き帰りなどには菩提山にも立ち寄り、僕の学問の進み具合をみてくれたり書を見てくれたりもする。

留守がちでそれほど多く話した記憶はなかったけれど、マメに文をくれる人だったのでいつも気にかけてもらっているという感じがしていて、僕ら兄弟はみんな父が好きだった。

さほど丈夫でない父の手助けが早くできるようになりたくて、僕は学問も剣術もどちらも疎かにすることなくうちこんでいた。

「羽柴の殿様の御嫡子ですね？」

「そうだ。弥勒丸様という」

弥勒菩薩からとったのかもしれないが、すごい名前だよな、とぼんやりと思った。

「そなたは、弥勒丸様の元で、ご薫陶をいただくように」

父は真面目な顔で言った。

（……弥勒丸さまのご薫陶？）

不思議なことを言うと思った。

僕は父が父であるせいなのか、あまり子供らしい子供として育たなかった。年齢より大人びていると言われて来たし、事実かわいげのない子供だった。
そんな僕が一つ年下の子供の薫陶をいただくなど何の冗談かと思ったのだ。

「弥勒丸さまは、神隠しに遭われていたとお聞きにしましたが……」
「そういうことになっている」
「本当は違うんですね？」
「……真実がどうかは誰も知らない。事実だけを述べるのなら、石丸君を亡くした南殿の気が触れ、弥勒丸さまを石丸君と思い、小姓らの目の前で攫い、弥勒丸さまを抱いて堀に飛び込んだ」
「……堀に……」
「南殿の亡骸はあがったが、弥勒丸さまは見つからなかった」

父の言葉は澱みがない。

「お堀ってそんなに深いんですか？」
「……深いは深いのだが、底なしというわけではない。何人もの人間が潜ったし、終いには底さらいまでした。……だが、それでも弥勒丸様はみつからなかった。見つかったのは、印籠と小刀だけだった」
「……弥勒丸さまは？」
「亡骸は見つからず……そして、行方知れずになってちょうど一月後、竹生島に参詣しようとしていた奥方様が琵琶湖の岸辺に倒れている弥勒丸さまを見つけたのじゃ」
「だから、『神隠し』と」
「そうだ」

父は深くうなづいた。

「最も、それは表だけの事情だな」
「裏の事情があるのですか？」
物事にはすべて表と裏があると父は言う。父は無言でうなづいた。
「他言無用のお家の秘事ではあるが、おまえには話しておく」
僕は姿勢を正した。
父が僕を一人前と見込んで話してくれる事だからだ。
「石丸君は殿のお種ではなかったようだ。……少なくとも南殿はそう信じていた」
「……え？」
「気の触れた南殿が呟いていたことだから真実かどうかはわからぬ。……だが、おそらく、それは事実だったのだろうと思う」
「なぜ、ですか？」
南殿という方が長浜より以前からご側室であったことを僕は聞いていた。
「それはわしらには預かり知らぬことだ。だが、事実だけを述べるのならば、南殿はその罪の意識にずっと怯え……、石丸君が亡くなり、己の罪が石丸君を殺したのだと思ったようだ」
そして、その罪の意識がやがて南殿の心までも殺した……と父は言った。
「今となってはもうどうでもいいことだ……弥勒丸さまはお戻りになり、すっかり元気になられた。……だから、皆、忘れる事にした

のだよ。南殿を……そして、南殿の罪を……」

忘却は最大の罰だ、と父は言った。
僕はよくわからなかった。
ただ、何だかひどく哀しいような気がしていた。

「……そなたは、弥勒丸様のことだけ考えて生きよ」

羽柴秀吉という男に人生を賭けた父は、その息子に僕の人生を賭けるようにと命じた。

「はい」

僕はうなづいた。
僕にとって、父の言う事は絶対だった。
父は満足げにうなづいた。ほんの少しだけ笑っていたように思う。

実際に弥勒丸さまの下に、僕があがったのは秋も半ばをすぎたひどく寒い日だった。

「おまえが吉助？」

子供らしい澄んだ高い声がした。

（……力のある声だ）

対面の間はがらんと広い。上座にある火鉢だけでは到底室内は暖めきれず、どこかピンと張った冷たい空気の中、その声はかすれることなく響いた。

「はい。……本日よりお側にあがります、竹中重治が一子、吉助と申します。」

頭を下げたまま名乗りをあげる。

「面をあげよ」

そう言われて顔をあげた。

そこにいたのは、秀麗な顔立ちの子供だった。

（に、似てない……）

殿のことは僕も知っている。父を得がたい部下と思って下さっているらしい殿は、僕や母にまで細かい気遣いをしてくれるような人でこれまでにも何度かお目にかかったことがある。

目の前の若君は、顔だけのことを言うのなら殿とは似ても似つかなかった。

言っては悪いが、殿は風采のあがらないちょっと頭のハゲあがったおっさんだ。『猿』という綽名通りの御方なのだ。元が百姓の出だというが、確かにその通りだ。きっと、この長浜の城主だなんて言われても初めて殿にあった人はたぶん信じられないだろう。

でも、弥勒丸様は違う。

とても整った顔立ちをしていて、どこの名家の子息だと言われても皆が納得するだろう品のある方だった。強いて言うならば、とて

も美しい方である奥方様に似ているということになるのかもしれない。

「俺のことは弥々でいいぞ」
「……弥々様、ですか？」
「うん。俺は吉と呼ぶでな。その方が身近な感じがするやろ。ずーっと側にいるんや。堅苦しいのは御免じゃ」

はは、と陽気に笑う。その笑顔に見惚れた。
トクンと心臓が鳴った。

「じゃあ、吉、行こう」
「……どこにですか？」
「台所じゃ。今日は栗飯の日でな。炊き立ての栗飯でむすび飯を作ってくれるとおっかあが言ったんや」

弥々さまは、地下の訛りを隠す風でもなくそのまま口にする。

「……ああ、言葉か？ええんや、今はこれで」

すぐに僕の聞きたいことがわかったらしく、にやりと笑う。

（……今は？）

「客前ではちゃんと普通にしゃべるでな」
「でも、城の若君さまが尾張の地下の訛りでお話になるのは……」
「いいんじゃよ。近江は近江で別の訛りがあるが、羽柴は尾張の出身やからな。少しくらいなまっていた方が百姓や足軽やそんな者らが俺らを身近に思えるやろ」
「そんな身分軽き者に気をつかわなくても……」

「でも、吉助。民のほとんどがその身分軽き者だぞ」
弥々さまはあっさりと言う。
「それは……」
「身分高き者の力も大事じゃが、名も無き大勢の民の力もまた大事じゃぞ」
「なぜ、ですか？」
「だって、民がいるから、俺はお城の若君なんじゃ」
民がおらなんだら、ただのクソガキじゃと肩をすくめる。
「弥勒丸様……」
驚きで目を見開きながらも、すとん、と胸に落ちるものがあって、僕は不意に何かを納得した。
何をとはっきりと言葉で示すのは難しいのだけれど、自分の中に生まれたものがあったからだ。
父が『薫陶』という言葉を使った意味がよくわかった。
（僕は、この方に御仕えする）
この先、何があろうとも僕はこの方にお仕えしよう。
この方が見るものを一緒に見て、この方が話す言葉を聞きとめよう。
この方を狙うものがあらば盾となり、この方の命あらば剣となろう。
父に言われたからではなく――――僕がそう決めたのだ。

第四章　吉助（2）

「吉は、栗飯好きか？」

弥々さまは、食べることがとても好きな方だった。

といっても食い意地がはっているというわけではなく、さりとて、こだわりが強いというわけでもない。強いて言うのならば、食べることをとても楽しまれる方だったというべきだろう。

僕は好き嫌いの多い子供だったけれど、弥々さまと食事をとるようになってからは、不思議なくらい食べられないものがなくなった。

「はい。大好きです。……弥々さまは？」

食べ物の好き嫌いを論じることはあまり良いことではないと思っていたけれど、素直に答える。それから、付け加えてたずねてみた。弥々さまについて、僕は知りたかった。

「俺も好きじゃ。芋飯や菜飯も好きやな」

「何か具が入っているのが好きなんですね」

「白い飯も好きやぞ。炊きたての飯を塩だけで握ったむすび飯は最高やし、それにひしおをつけて焼きむすびにしても旨いな」

「青菜の漬物を刻んでゴマふって混ぜごはんにしてもうまいですよ」

それは、育ち盛りでしょっちゅうおなかをすかせていた僕に母がよくつくってくれたおやつだった。

ここのお城で食べるような白米ばかりのごはんではなく、麦の分量が多いごはんだったけれども、それでもとてもおいしかった。

「へえ」

弥々さまは目を輝かせる。

こんな風な表情をしていると弥々さまは普通の子供だった。僕らはうまい食べ物の話をしながら厨へ向かう。

弥々さまは、道々にあるいろんな場所を説明してくれた。

僕は教えられるたびに、それを忘れないように頭の中に書き込んでゆく。

長浜のお城は、僕が育った山の屋敷と違ってとても広くて、一度には覚えきれなかった。

厨には奥方様がいらっしゃった。

僕はそれにもちょっとだけ驚いた。北近江十三万石の城主夫人ともなれば、厨に入る必要はまったくない。

だが、奥方様も弥々さまもまったく気にしていなくて、そこに奥方様がいるのが当たり前というように弥々さまは声をかける。

「おっかあ、栗飯は？」

「勿論、できとるよ」

（……栗の分量が……）

栗のむすび飯は、米と栗が半々じゃないだろうかと思うほどの栗の量だった。

「栗がいっぱいやな」

「弥々は栗が好きやろうが」

「うん」

にこにこと弥々さまは笑う。

「あと、きのこの味噌汁も作ったよ」
「ありがとう、おっかあ。……吉、食べよう」
「……ここでですか？」
「うん」

弥々さまはうなづく。
普通は部屋に運ばせて食べるものだった。厨に膳を並べるのは身分低き者だけ。
殿がお留守の今、幼くとも弥々さまは城主様なのだから厨で食事をするのはあまりよくないことだと僕は思った。

「あの、部屋で食べた方が……」

僕と同じ考えの人が他にもいたようで、おそるおそる申し述べる。

「あったかいうちに食べたいし、せっかくの初物の栗やもん。ここでおっかあと一緒に食べる。その方が旨いやろ」

弥々さまはにっこりと笑う。
ほわりと空気が柔らかくなり、そこにいた皆がつられて笑った。

「そういうことやから、さあさ、弥々と吉助の膳の支度をおし」

おね様がぱんぱんと手を叩くと、すぐに栗のむすび飯ときのこの味噌汁と古漬けの瓜を薄く刻み、生姜醤油をかけたものが出てくる。

「これが俺の好物なんや」

この古漬けの瓜をきざんだものに生姜を散らし、醤油をかけまわ

したものを弥々さまがとても好きなのだと僕は父から聞いて知っていた。
夏の最中、膳部の者がしくじって大量の瓜を古漬けにしてしまった時に、弥々さまが作り方を教えたもので、膳に上ることの多い品なのだと。

その時、父は言っていた。

『弥勒丸さまがそれを本当にお好きだったかはわからない。だが、それが弥勒丸様の好物となったことで、膳部の人間は一人も処罰されなかった……本来ならば、たいそうな失態で、殿も怒り狂っていたのだがな……』

『それは……』

たかが漬物一品のことと笑う無かれ。漬物というのは城中の人間全員に当たるようにまかなわれているものだ。そして、だめになったのは決して一日分の量ではあるまい。だとすれば、その損失はかなりのものになる。

『……弥勒丸さまは、他の漬物はほとんどお食べにならない』

僕は少しだけ驚いた。もしかしたら、漬物は嫌いなのかもしれなかった。

『弥勒丸様とはそういうお人だ』

父の言葉に僕はうなづいた。

「僕も好きです、これ」

それを聞いたときから、僕はこれを好きになった。
弥々さまは、うん、と満足げにうなづいてくれた。それが何だかとても嬉しかった。

「弥々、おかわりは？」
「にぎり飯がもう1個欲しいな」
「1個でいいの？」
「うん。吉にもな」
「……ありがとうございます」

僕は軽く頭を下げる。
少し物足りない感じだったから、弥々さまがそう言ってくれて嬉しかった。
まだ城に来て間もないのに、ずうずうしくおかわりを申し出ることができるほど僕は肝が太くない。
弥々さまはそんな僕の様子をよく見ていて、いつも気遣って下さる。

「前、佐吉と虎が食い物のことでケンカしたんや」
「……いつものことですね」

佐吉殿とお虎殿は犬猿の仲だ。佐吉殿のいつでも冷静沈着なところが虎殿には嫌味に感じられ、虎殿の豪放磊落でおおらかなところが佐吉殿には乱暴で大雑把に感じられるらしい。
まあ、僕にいわせればどっちもどっちだ。

「虎が今日の味噌汁は塩辛い言うて、佐吉が君子たる者、食い物についていちいち申し述べるのは卑しいって言ってな」

この二人のケンカの原因はいつもたいしたことではない。

「そん時に言ったんやけどな、『食べる』いうのは生きることの基本だから別に卑しくないと思うのや。塩辛い言うのも、まあ時々うるさいこと言うなって思うかもしれんが、おいしく食べるのは大事だからええと思うのや。俺は、卑しいのは、『食べる』ことに真摯じゃなくなった事を言うのだと思うんや」
「食べる事に真摯じゃない、とは？」
「あんな。大阪の商人の間で流行ったそうじゃが、鯛の頬肉だけをこそげてそれに大根の甘いところだけをおろしたものをかけて食べる料理があるんやとか」
「残りの部分は……」
「自分では食べんそうや……驕っとるやろ」

使用人や下の人間に下げるのだから確かに無駄にはならないのかもしれない。でも、それはひどい驕りだと僕は思う。

「……それは……」
「俺は、そういうのは好かぬ」
「僕もです」
「そやろ。俺は確かに食べる事が好きやけど、そんな珍奇なものを食べたいわけじゃない……異国にはなぁ、猿の脳味噌やら熊の手やらをありがたがって食べる国もあるのじゃぞ」
「へえ……」

弥々丸さまはいろいろなことをご存知だった。

「弥々丸さまは嫌いなものがありますか？」
「……俺は大概のものを好き嫌いなく食べられるつもりだが、蝗は無理だなぁ」
「蝗、ですか？」

「尾張にはなぁ、蝗の佃煮があるんや……なんていうか……俺は見るだけで食欲なくす」

あと、身体にはいいかもしれんが、蜂の子の食えぬ、と顔を顰める。

そのげんなりとした表情を初めて見て、僕は何となく嬉しかった。好きなものについてはよくお話になるけれど、嫌いなものについてお話になるのはとても珍しいことだった。

弥々丸さまは僕に対し、とても正直に素直に接してくれた。だから、僕も同じように正直に素直になることができた。

語り合う言葉の一つ一つが、弥々丸さまの見せる表情の一つ一つがとても大切に思えた。

「……おっかあ、味噌の味が変わったな」

「まあ、わかったかね」

「うん。塩が違うんやろか？」

「そうや。越後の塩で作ったんよ」

「へえ」

「やっと満足のいくものができたで、おまえの膳にあげたんじゃ」

これまでは厨の者と下働きの者で消費していたのだと奥方さまはおっしゃった。

「うん。……これは、うまいな」

「お弥々はちゃんと味わってくれるから、皆もつくりがいがあるというものだね」

おね様の言葉に弥々さまは、「皆、ありがとう」と笑って言った。

皆、一瞬、ぽかんとし、誰も何も言えないでいた。それから、差配の老女が「もったいないお言葉にございます」と申し述べて叩頭

した。皆がそれに続いた。感激のあまり目頭を押さえる者もいた。
羽柴の殿の人誑しは天下一品と言われるが、弥々さまもまた人誑しがうまかった。
殿が故意にそれを行うなら、弥々さまのそれは無意識だったから余計に性質が悪いような気がしなくもない。

（親子なんだなぁ）

顔はあんまり似てなくても、やっぱり親子なんだな、と僕は変なところで感心していた。

第四章　吉助（3）

その年の夏は暑く、播磨の戦況は、一進一退だった。

この長浜にいながら、弥々さまはいろんなことをご存知だった。というのも、弥々さまのところにはこまめにいろんなところから文が来ていたのだ。

殿や秀長様をはじめとし、殿の小姓衆からも。それの一つ一つに弥々さまは返事を書き、時には絵なども添えた。

それらを運んでくる商家の家人などとも弥々さまは親しく話をなさったし、時には大阪や堺にいるそれらの主人とも文のやりとりをなさっていた。商家の主人への文は僕が代筆することもしばしばあった。

僕は、父が僕に書の基礎を教えていてくれたことにこの時ほど感謝したことはない。

書だけではない、小太刀や剣術の基礎や、厳しすぎると思った学問やそういったすべてに僕は感謝した。父がそれを仕込んでおいてくれたから、僕は今まがりなりにも弥々さまのおまけの遊び相手ではなく、弥々さまの小姓として何とかやっていけているのだ。

父は遠い播磨の戦陣にあって、以前よりずっと遠くて顔を合わせることもままならなかったが、今は不思議と近く感じられるようになっていた。

僕にも父の気持ちが少しわかるようになっていたからかもしれない。

「文以外のものも運べるといいのになぁ」

「何を運ばせるんです？」

「え、播磨のおいしいものとかさ。讃岐のうどんとか食べたいなー」

「いいですね、それ」

「播磨の名物って何があるんだろうな」

「さて……」

弥々さまはごろりと寝転がる。

だらしがないと言われそうなことも、弥々さまがするとそうは見えない。

「海が欲しいなぁ、吉」

「海？」

「そ。海はいいぞー」

「弥々さまは海をご存知なんですか？」

弥々さまは近江近隣しか知らないはずだ。

近江の『うみ』と言えば、琵琶湖になる。琵琶湖は広いけれど湖だ。

「うん。……そうだな……まあ、いろいろとな」

弥々さまは曖昧に笑う。それは弥々さまにしては珍しい曖昧さだった。

「……敦賀か、若狭ですね」

頭の中で絵地図を広げて僕は言う。

「だな。越後は……無理やもんな」

越前は柴田様の領地であり、越後上杉家と対峙しているのも柴田様で、羽柴のお家が出る幕はない。

「海があるといろいろ便利ですよね」

僕はただぼんやりと港があれば町が活気付くし、弥々丸さまが喜ぶようなものが手に入るだろうな、と思っただけだった。

「港があれば、情報も流れ込むし、物流の新しい経路が開拓できるからなぁ。……水軍が欲しいなぁ」

まるで瓜が欲しいとか、新しい釣り竿が欲しいとかと言うのと同じ調子で弥々様は言った。

「……そう簡単に手に入るものでもないですよ」

「そやけどなぁ」

目を閉じて何事かを思案なさる。

線の細い弥々さまは、ともすれば姫に見間違えられることもあるくらいで、こんな風に無防備な姿を見せられると少しどきどきした。

「なあ、吉」

「はい」

「おっとうの小姓衆は羽柴の家のもんだけどな、吉は俺のやからな」

「……はい」

突然の事で、声が震えた。

嬉しかった。嬉しくて嬉しくて、言葉がでなかった。

「だから、吉は俺に遠慮のう自分の意見を言うのじゃぞ」

「……はい」

握り締めた拳に、ぽたりと涙が落ちた。

「吉は俺の鏡なのやから」

僕はその言葉を一生忘れないだろうと思った。

何度も何度も耳の中でその言葉を繰り返し、そして、自分の胸に刻み込んだ

この先、弥々さまには他に側近が何人もできるだろう。でも、弥々さまが僕を特別に思ってくれていることを僕はきっと二度と疑わない。

「……弥々さま」

小さな寝息。いつのまにか弥々さまは眠ってしまったようだった

弥々さまの眠りを妨げないように静かに立ち上がり、羽織をもってきてそっとかける。ぴくりと小さく身体が震えたけれど、弥々さまは目覚めない。気配に敏感な弥々さまは、殿や奥方様、秀長様以外の人間が近づくとすぐに目覚めてしまっていたが、最近は僕がいても気にしなくなった。

そのことが信頼の証のようで嬉しい。

そして、僕はいつもそうしているようにいつでも刀を抜ける姿勢で襖の前に陣取った。

■■■■■

真夜中だった。
ふと誰かの気配がして目が覚めた。
『……吉助』
そこにいたのは父だった。
「……父上？」
端然と枕もとに座っていた父は、僕が目覚めるとどこか困ったように笑った。
『見つからぬつもりでいたのだが……』
「……弥々さまのおかげで気配には敏感になっているんです」
弥々さまは、よく夜中に抜け出して遊びに行く事を誘いに来るのだ。
『そうか……弥勒丸さまとは仲良うしてもらっているようだな』
「はい」
僕はしっかりとうなづいた。
それだけは自信があった。
『……そうか。良かった』
父は笑った。
父のそんな笑みを見たのは初めてだった。
『弥勒丸さまはおまえを自分の鏡だとおっしゃられた。生きるも死

ぬも一緒だと……ゆえにおまえは望みすぎてはいけない』
「はい」
父は、僕のところに来る前に弥々さまのところに行ったのだとぼんやりと思った。
『私は……おまえが羨ましい』
「……父上が、僕を、ですか？」
『ああ。……あの方と共に戦い、あの方と共に生き、共に死ぬるだろう、おまえが羨ましくてならないよ』
溜息のような声音。
「……初めて聞きました。そんなこと」
僕はどういう顔をしていいかわからなかった。でも、心の中で弥々さまを自慢にしている自分がいることに気付いていた。
『……重門』
「……はい？」
『元服したら、重門と名乗りなさい』
僕は父をまっすぐ見た。
父は少し困ったように笑った。父のそんな表情を見たのも初めてだった。
「……はい」
僕はうなづいた。不意に状況を理解していた。
喉元まで熱いものがこみあげていた。

父は満足そうに笑い……そして、消えた。

「……父上……」

拳を握り締める。手のひらに爪が突き刺さった。

すっと襖が開く音がした。

「……吉……？」

寝間着姿の弥々さまだった。

「……弥々さま……」

「……今、半兵衛が俺のところに来た」

僕のところにも来たのだとうなづいた。口を開いたら、何かがこぼれだしてしまいそうだった。こらえきれない何かが涙となってぼろぼろと溢れた。

弥々さまは僕の手をひき、布団の中に押し込む。

「風邪ひくでな」

そして、自分も僕の隣に潜り込んだ。

「……菊花の契りって覚えてるか？」

こくりと僕はうなづく。唐の国の話で、再会の約束を果たすために魂となって戻った男の話だった。

「魂は千里を駆け抜ける……半兵衛はようやっと自由になったんや」

病で弱った体をいつも呪っていたからなぁ、と弥々さまは言う。

「……ちちが、ですか……？」

ぐすっと鼻がなった。

「うん」

弥々さまは僕の知らない父を知っていた。

「落ちついたら、おまえの知らない半兵衛の話をしてやるよ」

僕はうなづく。

そして、泣き止んだ僕に弥々さまはぽつり、ぽつり父の話をしてくれた。

でも、もっぱら話すのは僕だった。あまり一緒に暮らした事のない父だったのに、こんなにもたくさんの思い出があるのかとびっくりするほどにいろいろなことがあった。

空が白むまで話を続け、そのうちに僕も弥々さまも眠ってしまったらしい。

翌日、弥々さまの布団がもぬけの殻で城中が大騒ぎになっていても、僕らはまったく目覚めなかった。

またしても神隠しかと騒がれ、弥々さまの行方不明が奥方様の知るところとなり、そこで初めて僕もいないことに気付いた奥方様によって、眠る僕らは発見されたらしい。

あんまりにも幸せそうに眠る僕らを起こすのは忍びなかった、と奥方さまは笑って教えてくれた。僕らが目覚めたのは昼近くだった。

僕は、十日後の早馬で父の死を知ったけれどもう泣く事はなかっ

た。
悲しみは胸のうちによどんでいたけれど、それと共に生きることが父と生きることなのだと僕は知っていた。

■■■■■

「そういや、吉、小寺の子供が来るで」
前を歩く弥々さまが振り向く。
「小寺の子供って誰ですか？」
「……半兵衛が助けて手元に置いておった子や。小一郎おじの手紙にあったぞ」
「父の話が聞けるでしょうか？」
「聞けるやろ。そいつが来たら、船で迎えに行くぞ」
「……船、ですか？」
「安藤に作らせてるんや」

安藤というのは十人衆と呼ばれる長浜城下の富裕な商家で、そこの現在の当主である喜右衛門と弥々さまは仲がよい。
喜右衛門は既に５０歳過ぎ、弥々様は数えで７つになろうというところ。爺と孫にしか見えないが、内実はかなり対等だ。むしろ、喜右衛門は弥々さまを神の子の如く敬っているようなところがある。

「……船を、ですか？」
「そや。大きな船でな。１００人くらいは乗れるやろ」
「へえ……」
「九鬼の水軍の船はもっとデカいんやって。上様はもっと大きい船を作ろうとしてるって今井が言うてた」

今井というのも十人衆の一人で、こちらも弥々様の崇拝者の一人である。

「……早く、そいつが来るといいですねぇ」
「おう」

僕らはまだ子供だった。
でも、弥々さまはただの子供でいられるはずもなく、僕もまた弥々さまといる限り、ただの子供ではいられなかった。
僕らはいつも考え、話していた。
遠い播磨で起こること。京都や大阪のこと。自然、聴こえてくる安土の上様のこと……それから、これからの羽柴の家のこと。
僕と弥々さまの意見がすべて一致するわけではなかった。
何しろ、弥々さまの頭の中は僕の何倍もの速さで回転していて、僕にはついていけないことも多かったからだ。
そのたびに僕は弥々さまに説明を求め、弥々さまは僕に説明することでそれが普通の人間には理解できないことを知り、いろいろと修正を加えた。
話の種がつきることはなかった。

そして、その合間に、僕は弥々さまの神隠しの話を何度も聞いた。
殿にも、奥方様にも詳しくは話したことが無いというその話を、僕だけがちゃんと聞かせてもらったのは、たぶん、弥々さまも誰かに話したかったからなのだろう。

長い長い話を僕は涙なしで聞くことはできなかった。
まだその時に側にあがっていなかったのにも関わらず、弥々さまをお一人にした自分に腹がたったりもした。

「……僕も手伝います」
「ん？」
「『栞姫』を見つけること」
「……名前も違うやろし、俺のこともわからんよ、きっと」
「それでもきっと『栞姫』は弥々さまが見つけなければ幸せになれない、そんな気がします」

正直に言って、この時、僕は本当に二人の絆をわかっていたわけではなかった。ただ、弥々さまを喜ばせたかっただけだった。
僕は心のどこかで見つからぬことを祈り、同時に同じだけの強さで見つかることを祈っていた。

第五章　松寿丸（1）

「あなたが、松寿殿ですか？」

優しげな面差しの人だった。

「はい」

「ふむ」

目の前の人は、なにやら得心げにうなづいた。

「私は竹中半兵衛重治といいます」

「……竹中半兵衛殿……」

羽柴の御家の参謀として高名な人だった。

智謀にも武勇にも優れ、二十歳になるやならずやの時期に十数名で稲葉山城を占拠した事は今も語り草になっている。それは、各地を回る講釈師の物語の種にもなっていて、儂も何度か聞いた。それだけでは足りなくて、父にねだってその話を書き留めてもらったこともあるくらいだった。

その物語の主人公が目の前にいた。

想像よりもずっと優しげな人であることに驚いた。確かに講談師は見目麗しき好漢だと言い、筋骨隆々とは言わなかったが、こんなにもはかなげな人だとは思わなかった。後にして思えば、それは半兵衛殿が既に病に侵されていたせいだろう。

この時、儂がいたのは安土の城下だった。

荒木殿の謀反が噂され、父がその説得の為に有岡城に入ったと聞いた。二月たっても父は帰らず、信長様が儂を殺すように命じるのもそう遠くは無いと儂の世話をしている者達が言っていた。

『織田の殿様は裏切りを決して許さない』

そう噂されていることをわしは知っていた。

（父上は、裏切らない……）

父は、確かにいろいろな策謀を巡らせる人間だ。だが、それは頭の中だけのことで、実際にそれを実行できるかはまた別の話だった。基本、父上は露悪的な人で、口ではいろいろ大げさに言うし、その言葉を信じて嫌悪を覚えている人も多い。

だが、信頼をいただいた人間を裏切れるほど強くはない。少なくとも、儂の知る父上はそうだった。

だが、それは父上を知らない織田様にはわからぬことだろう。

（父をご信頼いただいているのは、織田の殿さまではなく羽柴殿だろうし……）

誤解で殺されるのは損だなぁと思ったが、仕方がないとも思った。

儂に誤解をとく術はない。

「……儂は、殺されるのですか？」

儂はこの人に殺されるのかと思い、この人になら殺されても良い、と思った。

くつくつと半兵衛殿はおかしげに笑った。

「……何がおかしいのですか？」
「いや。随分と落ち着いているようだったので……。松寿殿、私はあなたを助けに来ました」
「……儂を？」

思わぬ言葉に儂は驚いた。

「このままでは上さまは貴方を殺すよう命じるでしょう。ですが、羽柴の家では官兵衛殿が裏切ったとは思っておりません」

思わぬことに、儂は目をしばたかせる。

「ですから、貴方を逃がします。貴方には長浜に隠れてもらいます」
「……長浜に？」
「はい。長浜には羽柴の殿の御嫡子、弥勒丸さまがおられます。弥勒丸さまがすべて承知されておりますから、貴方はそこで御父上の救出をお待ちなさい」
「弥勒丸さま……」
「何かある時は弥勒丸さまに相談なさると良い。弥勒丸さまが良いようにして下さいます」

儂は半兵衛殿の言葉にうなづいた。
父が、この方に複雑な感情を抱いている事を儂は知っていた。羽柴の殿の参謀、あるいは軍師と言えば、この方であり、父はこの方と肩を並べねばならなかった。
儂は、半兵衛殿と一月の間一緒に過ごし、そして、書写山に戻るという半兵衛殿と別れた。

「弥勒丸さまによろしくお伝えください」
「はい」

半兵衛殿は弥勒丸さまという若君とよほどお親しいらしく、長い長い手紙と笛とを預かった。儂はそれを胸元に入れた。荷物は無くしてもそれだけはなくさない為だ。

「……松寿殿、参りますよ」

「お願いします」

羽柴の家と懇意にしているという商人の一行に同行させてもらうことになっていた。

「さて、ではしばらくはわしのことは番頭さんと呼んで下さい。わしらはあなたを松吉とお呼びします」

「はい」

供の者達は荷の護衛のフリをし、儂は小僧のフリをしていた。半兵衛殿の策略で儂は死んだことになっているとはいえ、用心にこしたことはなかった。

こんな場合なのに、儂は少しだけワクワクしてもいた。

本当だったら、こんな商人の、しかも丁稚風情の真似事などは死んでもしたくないというところだったが、今の儂にはそれを楽しむ心の余裕があった。

「弥勒丸さまの元へ行ったら、小僧に化けて抜け出した話をしてさしあげるといいですよ」と半兵衛殿に言われていたからだ。

「……弥勒丸様はとてもやんちゃな方で……野菜売りの農家の子供のフリをして城を逃げ出した事が何度もあります。あの方の農家の子供のフリは天下一品です。あなたのそういう冒険の話を喜んでお聞きになるでしょう」

「……儂は話下手ですし……」
「大丈夫です。弥勒丸さまが聞き上手ですから」
儂は考え込んでしまうタイプなので、父からは、鈍いとかどんくさいといつも言われていた。使い物にならないとも。
「……こんな儂でもお仕えすることができるでしょうか？」
だが、半兵衛殿は違った。儂が考え込んだ理由を聞き出し、それの一つ一つに回答をくれた。儂は少しだけ自分に自信が持てた。
「ええ、きっと。……うちの吉助は弥勒丸さまのお止めする重石になることはできませんでしょうから、松寿殿はぜひとも重石になって下さい」
期待しています、と笑った。
「儂はどんくさいだけです」
「それが必要なこともあります。大丈夫です。弥勒丸さまはちゃんとおわかりになる方ですから」
半兵衛殿のお言葉があったからこそ、儂は弥勒丸さまにお会いするという希望をもち、正体がバレてつかまったら処刑されかねない危険な中を、泣き喚かずに進むことができたのだ。

■■■■■

「あれ、松吉……いや、松寿様、もう迎えが来てるようですよ」

大津に入ったのは夕刻だった。

大津港を中心に広がった町並……港町というのは、夜が近くなるほどに朝とはまた別の意味の喧騒を増すようで、ひどくにぎやかだった。

「なぜ、わかるのですか？」

「あの紺無地に沢瀉の紋は羽柴様の紋です。御用船ということです」

「御用船……」

「羽柴様の御用船が今、大津の港にいる理由はただ一つ。あなたを迎えに来たんですよ、松寿さま」

予定より早いですねと番頭の伊介さんは言った。

大津から船で湖を渡る。陸路を行くよりも何倍も早いのだと伊介さんは教えてくれた。

伊介さんは、長浜の安藤家の番頭だった。

安藤家というのは、長浜十人衆に数えられる富裕な商家で、羽柴との縁が厚いのだという。ことに今の御当主は弥勒丸さまの信任が厚いらしい。

「約束は明日ですが、港に行って見ましょうか」

「……はい」

儂はうなづいた。

誰が来ているのかはわからなかったが、これでやっと安心できるのだと思った。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n7420y/

夢のまた夢

2012年1月8日00時42分発行